

眞の宗教への道

矢野 鍊明

宗教肯定論者は「宗教は人と人以上の者即ち神との聖交なり」云ひ、亦「宗教は吾々の心霊がそれ自身の内に見出しぬない處の善美を實現するために、それ自身以上の實在に向つて喘ぎゆくことである」と、或は「我等の道德的義務は神が與へ給へる命令だと悟ること、之れ宗教である」と云ひ、又「宗教とは客觀的實在に對する絶對憑依の感情である」と定義してゐる。然るに宗教否定論者ども云ふべき唯物論者フオイエルバツハは「人間は自己の願望の對象を理想化してそれを自己に對立する實在と考へ、之を神として祈願を捧げる、而もかくの如きは畢竟幻想たるに過ぎない」と云ふに至つては宗教も神も實に無味乾燥のものとなり、隨つて人間の願望の投影たる神を信することは人類の不幸である。と彼は考へた。

然し何れにしても我々は神なり佛なりを信する爲にかく宗教を定義し、信仰の對象を定義しなければならぬか、又定義し得て初めて信仰心が起るのであるか。といふに我々はこれ等の定義がなくとも又神の實在に對する證明の努力がなくとも、又神を否定する者があつても、それ以前に於て既に神を

信じてゐるのである。それが神を信ずると云ふやうなはずきりしたものでなくとも、自己の貧弱無能を深く凝視すればする程何となく神のやうなもの、偉大なるものを信じて縋りたいやうな氣持ちになる。こゝに宗教的感情の先天性とも名付くべきものがあると想ふ。

二

然し我々は先天的にこのやうな感情を有するとしても、宗教の輪廓を科學的に定義付けて之を畫くとき、その信仰對象の實在性と神秘的威嚴とが疑はれるのみならず何となく以前のやうな純な感情を以て禮拜することが出来なくなる。こゝに安價なる偶像の破壊、宗教の否定が起るのではなからうか。或人は偶像を破壊し、神を否定した。彼等はその慰安を宗教以外に求めんとした。然しその三昧には仲々這入れなかつた。彼等の満たされざる淋しき心——それは遂に何物にか縋らんとする感情、その感情迄ゆかぬとしても、神の如き「力」あるものゝ存在を欲求した。かゝる欲求はそのやるせない心の底から力強く頭を擡げ、遂に神を否定して神を信じ、偶像を破壊して生きた血の通ふ偶像を建設した。この過程は宗教信者に於いては、尤も苦しい、悲惨な、なやましいものであり、そして恐らくこの苦しい過程こそ苦闘を續けた体験者でない限り想像は出来ないであらう。而して一面この過程位尊いものはないと思ふ。その過程は唯「破壊より建設へ」の一語に盡きるが、その間、人間は如何に淨化されることか。この破壊は知信の闘争である。否定すること、それは餘りに淋しい、然し信す

るには又餘りに空虚だ。我々が神に對し空虚を切々に感ずるとき、そこに神の否定があり、亦そこに建設の若草が萌生するのである。

如何なる過程を経、如何なる根據に立脚しての無信仰であるかは分らぬが、少なくとも現代人の無信仰を見ると、何となく淋しい。既成宗教が嫌であり、偶像に價値を認めないとしたら、もつと眞面目に破壊し盡すべきである。

三

我々は神の名を稱へ、佛の御名を唱へて合掌する人の姿を尊く思ふ。神の名を稱へる人こそ人生の眞の意義を知り、佛の御名を唱へる者こそ幸福であり、自己を眞に知る者である。佛に華を捧げ、香を焼き、合掌する清らかな心の所有者は遂に人間をも合掌したくなる、不輕菩薩が「我深く汝等を敬ふ、敢へて輕慢せず。所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし」と。佛を禮拜する心は善人を崇敬する心である。随つて他人を敬へば自分も敬まはれるであらう。又この感情は鳥獸より草木へ、宇宙全体へと進展して宇宙愛に生きることが出来るやうになるのではなからうか。この境地迄來れば、自己と社會との關係がより明かになり、無神論者の想像だになし得なかつた宗教的犠牲の精神も生れて來、現代やかましい社會問題の解決の鍵も得られるやうになると思ふ。

四

かく神を信じ、佛を信じた者がいつ迄その信が續くか、それは各自に關することであり、又未知の問題である。要は唯信じられればよいのではなからうか。然し神なり、佛なりを信ずることに各人の現在の信に至る過程及現在の信の状態によつて信仰の對象に淺深高下のあるは免れない、即ちルーソーが懺悔録の中に「概して信仰者と云ふ者は、各々自身の通りの神を爲る。正人は善神を爲り、惡人は邪神を爲る」の類である。故に我々は實に於いてよりよき信仰者とならねばならぬ。その爲には我々には生爪をはがすやうな變化を豫期せねばならぬ。その過程が波瀾曲折、宗教の破壊に次ぐに破壊、本尊の否定に否定を以てし、絶望の淵より光明へ、光明より又暗黒へと向ふいたましい過程こそ眞の宗教を建設する所以のものではなからうか。我々は心からこの過程を欲しない、出来ることならば唯有り難くて、毎日々々を感謝の生活、法悦の日を以て過したい。然し我々の理知はそこに妄信をゆるさぬ。こゝに知信の闘争があり、この波瀾曲折があるのだ。而し破壊は建設の爲の破壊である。我々は神や佛を信じられなくとも決して絶望する必要はない。又いつか妙法の華咲き、果結ぶ時もあるのだ。唯我々は知信の闘争を経てこそ眞の宗教を建設し、我々の精神に躍動する生きた佛を創造することが出来るのだ。

